
ペットボトルボウリング

nab42

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ペットボトルボウリング

【Nコード】

N1406U

【作者名】

nab42

【あらすじ】

ペットボトルを集めるように頼まれた主人公と、悲しみを感じながらも生きていく人たちの五つの物語。

ペットボトルボウリング 1

「お兄ちゃん」

誰かが俺を起こす声がする。

「お兄ちゃん」

その声はもう一度聞こえた。

太陽の強烈な日差しをうまく避け、扇風機をかけながら縁側で寝ていた俺はゆっくりと目を開けた。太陽は屋根に隠れて見えていなかったが、それは空のてっぺんに向かってどんどんと昇っているはずだ。

「お兄ちゃん」とそいつは言った。

「なあ」と俺はそいつを見ながら言った。

「お兄ちゃん、やっと起きた」

「なあ、お前……」

心の中では、誰にもぶつけられない変な怒りがこみ上げてきていた。

「なあ、なんでお前は弟なんだ。なぜ妹ではないんだ」。

「え？」

「知り合いに聞いたんだが、お兄ちゃんと言っていいのは妹だけらしいぞ」

「お母さん！ お兄ちゃんがおかしい！」

「おかしいのはお前だろう。人の怠惰な時間を邪魔して」

弟は短パンにＴシャツという夏らしい格好でそこにいた。もちろん俺も同じ格好をしていた。違うのは弟のＴシャツは戦隊モノのやつで、俺のＴシャツは無地だということだ。

理髪店に行く俺と、親にバリカンで丸坊主にされた弟は、全く似ていない。叔母さんや近所の人たちは弟を見て、お兄ちゃんの小さい頃にそっくり、と言うが、そんなのでために違いはない。記憶力というものは年々衰えていくというではないか。

「で、なんだ、何の用だ」

「お兄ちゃん、ペットボトル持ってない？」

「ここにあるけど。ひとつ」と俺は弟にソーダが半分残っているペットボトルを見せた。

「中身捨てていい？」

「いや、ダメだろ。まだ飲んでる」

「じゃあ、他のペットボトルちょうだい？」

「他のペットボトルなんてないよ。お母さんの方が持ってるだろ」

「お母さん、昨日捨てたって」

そういえば昨日はペットボトルを捨てる日だったな、と俺は冷蔵庫に貼ってあるゴミ捨て日のスケジュール表を思い浮かべた。

「何に使うんだ？ ペットボトル」

「夏休みの宿題。工作のやつ」

弟はいつの間にか、ソーダの入った俺のペットボトルを持っていた。

「ふーん。小学生はそういう面倒くさい宿題やるんだな」と俺は言いながら、そのペットボトルを奪い返した。

「お兄ちゃんはないの？」

「ないよ。昔はあったけどね」

「昔は何を作ったの？」

「紙粘土で貯金箱を作った」

「なに、そのつままないやつ」

「いや、面白いだろ」

「つままないよ」

「そうだな。つままないな」

俺はペットボトルのキャップを開けて、ソーダを飲んだ。生ぬるいその甘い液体は、喉をチクチクさせるだけだった。もういらなくな。

「ペットボトルいる？」と俺は弟に聞いた。

「いる」

そう言つと、弟は俺からペットボトルを受け取つた。

「何作るの？」

「秘密。でも、面白いやつ」

「へえ。作つたら見せてよ」

「うん。見せる」と弟は言つて、残りのソーダを飲み始めた。

風鈴がチリンと鳴り、心を涼しくさせた。夏だなあ。

「ああ、あとね、お兄ちゃんにお願いがあるんだけど」

「お願い？」

「うん。お願い」

「なに？」

「ペットボトル探してきて」

何を言っているのだろうか、この妹じゃないやつは。

「ペットボトルあげたじゃん」と俺は生ぬるいソーダの入っていたペットボトルを指差した。

「まだ足りない。もつという」

「どのくらい？」

「あと五本くらい」

「それを俺に探してこいと？」

「うん。暇そうだし」

「嫌だよ」と俺は再び寝ころんだ。「自分で探してこいよ。俺だつてごろごろしたいんだよ」

「お兄ちゃん、お願い。一生のお願い」

「お前の一生はここで終わる」

俺はそう言い終わるか終わらないくらいで、弟の後ろにすばやく回り込み、わき腹をくすぐった。弟がわき腹を庇うため、腕を体に付けるのを見て、俺は正面へ移動し、今度は足の裏をくすぐった。

「や、やめて」と弟は声にならない声で笑い転げた。

弟の弱いところはお見通しだ。なぜなら、俺の弱いところとほぼ同じだからだ。

一分くらい続けると、なんとなく疲れてきた。くすぐるのを止め

ると、弟は涙を拭い、息を整えた。

俺は考えていた。これが妹だったらどんなに可愛かっただろうと。逆に俺が姉だったら、それもまたよかったのかもしれない。だが、こいつは弟で、俺はどう考えても兄だ。それにもし、こいつに可愛げがあったとしても、それはこの辺りに出没する野良猫のピーちゃん以下だ。弟はどうしようもなく、どうしようもないやつだ。

「仕方ない。暇だし、そこらへんぶらぶらしてくるよ」

「えー？ お兄ちゃん出かけるの？」

「そうだ。ついでにペットボトルも探してきてやるよ」

「本当に？」

「本当だ」

「やった！」

弟は喜ぶと一目散に居間から出て行き、台所にいる母に「お兄ちゃん、ペットボトル探してきてくれるって」と報告した。

「よかったねえ」と母が言った。

「うん。お兄ちゃんは僕のスレイブだからね！」

「すれいぶ？」

「うん。スレイブ」

まったく、なんてやつだ。兄である俺は、弟の奴隷らしい。

そう思いながらも俺は自室に戻り、Ｔシャツを替えた。そして机の上に置いていた腕時計と財布、携帯を持ち、出かける準備を整えた。自転車に乗るため、車庫に行くと、そこには弟がいた。

「お前、なにしてんの？」

「お兄ちゃんに袋渡そうと思って」

「なんの袋？」

「ペットボトル入れるための袋」

「ほお」

「変な顔」と弟は言った。

「お前はさすがにこいやつだな！」

俺は、そう捨て台詞を吐くと自転車にまたがった。道路へ出る前

に左右を見て、安全を確認すると海の方へ漕ぎ出した。

「いつてらっしゃい」と大きな弟の声が後ろから聞こえてきた。

太陽はずっと上にいた。炎が近くにあるかのような空気が全身を包んだ。だが、俺は気持ちよく自転車のペダルをこぎ続けていた。

「夏の風もなかなかだな」と俺はひとり言を小さく呟いた。

ペットボトルボウリング 2

日焼けは確實だろうな。

そう思いながら俺は、堤防沿いの道を進んでいた。

しかし、海がすぐそこなのに、海が見えないとはどういう拷問だろうか。海は入るか眺めるかするものではないのだろうか？

俺は海へ降りていける入口を見つけると、自転車を止め、その階段を降りた。

だが、海はそこになかった。どうやら干潮の時間らしかった。海は遠くの方にあつて、いつもは海水のせいで隠れている灰色の泥底がそこにはあつた。

そうだった。この海はこういう海だった。海という言葉から想像する綺麗さはここにはないのだった。あー、沖縄に行きたい。沖縄の青い海で泳ぎたい。いや、それは想像だ。沖縄の海が青いのかどうか俺は知らない。

この地元の海を見ても、特に際立った感情がこみ上げてくるわけじゃない。でも、やはり地元というのは強い力を持っている。この海が何事もなく、ここにあればいいなと俺は思った。

俺は階段に座り、しばらくの間、ぼーっと海を見ていた。果たして、この泥の海を海と呼んでいいものだろうか、そんな事を考え始めた時にペットボトルのことを思い出した。ご主人様のためにも探さなきゃなあ、そう思い立ち上がると、堤防沿いを歩きながらペットボトルを探し始めた。

しばらく歩いていると、堤防の向こうからエンジン音が聞こえてきた。車は停まったらしく、俺の横からエンジン音が移動しなくなった。するとその音が止まり、ボタンとドアが閉まる音がした。俺はなんとなく、堤防を背にしてその場に屈んだ。上を見上げると手が見えた。どうやら堤防に登ろうとしているらしかった。

「いやあ、悩むことじゃあないと思うよ」と男が言つて、海を背に

して堤防に座った。

「そうかなあ？」と今度は女の声が聞こえた。

「そうだよ。好みだよ」

「うーん。でも、嫌いじゃない」

「俺？ 俺は嫌いじゃないよ。好きでもないけど」

「うーん」

何を悩んでいるんだろうか？ その前に彼らはアベックか？ いや、その前にアベックという言い方は古いか。じゃあ、あれか、恋人同士か。

彼らはそこで会話を止めた。

なんとなくその場から動きづらくなった俺には、夏の日差しが襲いかかった。帽子を被ってくればよかったかなあと思い、何気につけていたビニール袋を被ってみた。だが、ビニールの感触は、肌にまとわりつき、余計に俺を暑くした。俺は彼らと同じく、じっとしていることにした。

しばらくすると、車のドアが閉まる音がし、続けてエンジンのかかる音がした。俺は立ち上がり、背伸びをした。車はエンジン音とともに、遠くへ行った。

すると、何かが上から落ちてきた。驚いて、横に体をずらすと、落ちてきたそれはペットボトルだった。

「地元の海を」

俺はペットボトルを拾いながら、そう言った。しかし、言うほど怒りはこみ上げてこなかった。

せつかくだから、貰っておこう。上から落ちてくるなんて、天の恵みかな……。いや、待て、人が捨てたものを天の恵みだしたら、あまりにも情けない気がするんだが。……でも、まあ、いいか。

俺はペットボトルを、弟から手渡されたビニール袋に入れた。

弟とみかんの皮

一年ぶりに海へ行くことにした。そこらの海とは違う地元の海へ。そこは良くも悪くも、思い出のある海だった。初めて出来た彼氏とも何度か行ったことがある。特になにもすることがないから、ただ話をするだけだった。でも、私にはそれで十分だったような気がする。初めての恋の成就に舞い上がって、背伸びをしすぎてもいいことはないのだ。

「海行く？」と私が居間にいた弟を誘うと、弟は雑誌を開いたまま「行く」と返事をした。

私は外に出て、ミニクーパーのエンジンをかけ、弟を待った。五分ほどすると、外着に着替えた弟がやってきて、助手席に座った。

「クーラーつけようよ」と弟は言った。

「えー？ 窓開けてるからいいじゃん」

「クーラーの方がいいよ」

「えー？」と私は再度言った。

「ダメなの？」

「仕方がないなー。つけな」と私が言うと弟はエアコンを操作し始めた。

海に向かって車を走らせていると、だんだんと彼氏との思い出がよみがえってきた。あんなに好きだったのに、なぜ私たちは別れてしまったんだろうか。

「そっいえばさ」と弟は私に話しかけてきた。
「なに？」

「お姉ちゃんって、みかん好きだよね」

「うん。好き」

「梨も好きだよね」

「うん。好きだけど、それがどうしたの？」

「でも、皮が一番好きなんだよね」

「うん」

弟は何が言いたいのだろう。

「みかんの皮っておいしいの？」

「おいしいよ。渋くて硬くて、少しだけ酸味があるの。あ、甘みもある」

「そうなんだ」

「食べてみなよ。生で食べられないなら、今度、砂糖漬けにしてみようか？」

「いや、いい」

本当に弟は何が言いたいのだろうか。

それにしても、この世にみかんの皮が嫌いな人がいるのだろうか。私はいないと思う。いや、いないと思っていた。頭の中には好きだった彼の顔が再び浮かんできた。

「お姉ちゃん、赤」

弟のその言葉で、私は頭の中にある世界に入りそうになるのを止めることができた。

「田舎だから交通量多くないけど、それでも運転に集中しないと事故起こすよ」

「うん。ごめん」

「事故起こさなかったからいいけど」

「うん」

私は、弟の注意をしつかりと聞いた。実は、最近、何度か事故になりそうな運転をしていたのだった。これだから女のドライバーはと言われても、何も反論できなかった。反論するならば、女じゃなくて私が悪いのということだろうか。しかし、私が女であることにはかわりない。

海岸沿いにある堤防道路を走り始めると、弟は「何考えてたの？」と黙っていた私に聞いた。

「ん？ 私？」と私はとぼけてみた。弟に男のことで悩んでいるの

を勘付かれるのは嫌だった。

「そう、あなた」

「別に。何も」

「嘘だあ」

「嘘じゃない」と私は嘘をついた。

「まあ、みかんの皮が嫌いな人もいるけどさあ。それは好みだよ」
みかんの皮？

「何が？」

「だから、みかんの皮。人の好みによるよ。不味いかどうかなんて」
「なにそれ。なんのフォロー？」

「別にフォローじゃないけどさ」

堤防から海へ降りられる入口を少し通りすぎたところで、私は車を停めた。

「本当は不味いのかな？ みかんの皮……」と私は弟に聞いた。

車のエンジンを切ると、弟と私は車から降りた。

「いやあ、悩むことじゃあないと思うよ」と弟は言った。

本当にそうなのだろうか。本当は私の味覚に問題があつて、彼に作った料理も不味かったのではないだろうか。彼はそれを我慢して食べていたのではないだろうか。そして、私がみかんの皮をデザー
トに出した時に我慢の限界を知ったのではないのだろうか。

しかし、やはり私にはみかんの皮が美味しく思えた。

「そうかなあ？」と私は疑問を言葉にしながらも弟にその同意を求めた。

「そうだよ。好みだよ」と弟は言ってくれた。

弟はみかんの皮が好きなのだろうか？ だが、私は弟がみかんの皮を食べているところを見たことがない。

「うーん。でも、みかんの皮嫌いでしょ？」

「俺？ 俺は嫌いじゃないよ。好きでもないけど」

「うーん」と私は悩んだ。

結局のところ、みかんの皮は美味しくないのではないだろうか。

弟はただ私をフォローしたかったのかもしれない。ならば、なぜフォローしたいのだろうか。やっぱり、彼のこと、または私が彼と別れたことを知っているのかもしれない。となると、どこで知ったのだろうか？ うーん。恥ずかしい。恥ずかしい。恥ずかしいなあ。本当に、なんだ。ちくしょう。

私の頭にはまた、彼の顔が浮かんできた。

弟は家から持ってきたお茶を飲みながら、堤防に腰かけて、しばらく海を眺めていた。弟はこの海に思い入れでもあるのだろうか。こいつも彼女とこの海に来たことがあるのだろうか。

五分くらいそこにいただろうか。私たちはどっちが言いだすわけでもなく車に戻った。車の中はまた、暑くなっていた。

堤防道路から降り、農道を走っていると、私は弟がさっきまで飲んでいたお茶入りのペットボトルを持っていないことに気がついた。

「お茶はどうしたの？」

「ああ、あれは捨ててきた」

「え？ どこに？」

「海に」

「ええ？」と私は驚いて、弟の方を向いた。

「いや、前向いてよ」

「ええ？」と私は前を向きながら、もう一度驚いた。「ちょっと、モラルのないことしないでよ」

「ん？ どうしたの？ あの海に思い出もあるの？」

「いや、あの海はさあ、地元の海でしょ？」と私はなんとか答えた。

弟は何も言わなかった。

私はちらりと弟を見たが、何を考えているか全く分からなかった。家へと戻っていると「ねえ」と弟が言った。

「なに？」

「なんか腹減った。スーパー寄ってくれない？」

「スーパー？ 何買うの？」

「パンか何か」

私は弟の運転手か？　と思っただ、元々彼を連れだしたのは私だったのを思い出した。そういえば、なぜ私は弟に海に行こうと言ったのだろうか。一人じゃ寂しいからか？

スーパーに着くと、私は比較的空いている駐車場の隅に車を止めた。私は駐車が苦手だった。駐車スペースに突っ込んで駐車するのが常だった。

「駐車練習したら？」

「分かってる」

車を降りると、夏の熱気が私たちを包んだ。だが、これも幸せのための、苦痛なのだ。スーパーの自動扉が開くと、すーっと、心地よい冷気が私たちを出迎えてくれた。これが私は好きだった。

「あー、涼しい」と私は思わず言った。

「ほら、夏みかんあるよ」と弟は果実コーナーを指さして言った。

「あるね。夏みかん食べたい？」

「いや、別に」と弟は言っで、どこかへ消えた。

私は夏みかんを二つ買って、車へ戻った。袋から夏みかんを出していると、弟が戻ってきた。

「買ったんだ」と弟は言いながら、席に座った。彼の手には棒アイスが握られていた。

「いーなー、アイス。私のは？」

「ねーよ」

「なんで？」

「なんで？　って、なんで？」

「なんで？　って、なんで？」

「知らんよ。みかん持ってるじゃん。それ食べなよ」

「うーん」と私は言っで、しぶしぶみかんを皮ごと齧った。ほろ苦く、みかんの爽やかさが香る繊維がたくさんあるそれは、やはり美味しかった。

スーパーから出ると、しばらく何事もなく進んだが、家へと戻る道にある、最後の信号に私たちはつかまった。

私の手にある夏みかんの四分の一はなくなっていた。

「いる？」と私は言つて、弟の顔にみかんを近づけた。

「いらん」と弟はアイスの棒を噛みながら言った。

「皮ごと食べてごらんよ。美味しいよ」

「いらん。不味いだろ」

「ええ？」と私は驚いた。さつきまで、私がフオローだと思っていたものはフオローではなかったということだろうか。

「でも、嫌いじゃないって言ったじゃん」

「言つたよ。でも不味いものは不味いだろ」

「えー。なんか騙された気分」

「そう簡単に騙されないでよ。俺は、好みの問題って言つただけだよ」

「そうだけどさあ。美味しいと思つてたんだから」

「お姉ちゃんにとっては美味しいんだろ。それでいいじゃん」

「えー？」

「ほら、青だよ」と弟は前を見て言つた。

私は前に向き直つて、車を走らせた。

「彼氏と別れたこと気にしすぎだろ」と弟は言つた。

「え？」

「『え？』じゃないよ。そんなに気にしているんなら、彼氏と仲直りすれば？」

「ちよつと、なんで知つてんの？」

「皆知つてるだろ」

「いや、知らないでしょう。もしかして、葵ちゃんに聞いた？」

「葵さんからは何も聞いてないなあ。お姉ちゃんの友達っていうだけで、そんなに知らないし」

「えー？　じゃあ誰から聞いたの？」

「さあね。まあ、いいじゃん」

それから、私は家に着くまで、どうやってそのことを知つたか執拗に弟に聞いた。だが、弟は何も教えてはくれなかった。

私は、自宅の駐車スペースに車をバックで入れて、サイドブレーキを引き、エンジンを切った。助手席に置いていたスーパーの袋を手にとつて、車から降りた。鍵を閉め、家へと戻ると、家の外ではお母さんが、猫のピーちゃんに餌をやっていた。

「野良猫に餌やると、色々と問題だよ」と私は母に忠告して、家の中へ入った。

「ただいま」と私が言うと、遠くから「お帰り」と声がしたような気がした。だが、今、家の中には誰もいない。父は仕事で、おばあちゃんは温泉旅行。お母さんは外にいるし、弟は一年前に心筋梗塞で亡くなった。一週間前が一周忌だった。

私は、あの日から彼氏のことを思い出すことがなくなった。こんなものデザートじゃないだろう、と私の好物を否定した彼のことなんかどうでもよかったのだ。私はただ、初めて付き合った人と別れたというのがショックなだけだった。

そんなことよりも、私は弟を失ったことが苦しかった。それは一年経った今でも忘れることができない。何度も弟の顔が、脳裏に浮かぶ。彼氏と海で何を話したのか覚えていないのに、あの日、車の中で、弟とした会話はいつでも思い出せる。何度でも、何度でも、繰り返して思い出しても、それが褪せることはない。

私は一番奥の部屋に行き、弟がにっこりと笑っている写真の前に、夏みかんを置いた。そして、手を合わせて、もう一度ドライブしたいね、と心の中で呟いた。返事は返ってこなかったが、姉思いの弟は「うん」と答えてくれるはずだ。

ペットボトルボウリング 3

「先輩、こんにちわ」

声のした方を振り向くと、そこにはタカシがいた。

「おう、タカシ。久しぶりだな」と言いながらも俺は公園の休憩所でまどろんでいた。

「先輩こそ、元気そうで……。相変わらず暇そうですね」

「ああ、暇だ。俺はいつでも暇なんだ」と俺はあくびをしながら言っただ。

タカシは、俺が通っていた中学の制服を着ていた。つまり、タカシは俺の中学時代の後輩だ。

「受験勉強はしなくていいの？」

「推薦で行くから大丈夫です」

「お前まだ卓球やってたのか」

「これからやります」

「素人の俺より弱いのか」

「もう僕の方が強いですよ」とタカシは言って笑った。

「部活終わりか？」と俺はタカシの持っていたスポーツバッグを見て言った。

「はい。今日は自主練でした」

「そうか。じゃあ、元気なんだな」

「ええ、至って健康ですよ」

「いいことだな」

「先輩はここ何しているんですか？」

どこかにいる蝉の声が、響いてきた。それに応えるように、違う蝉が鳴いた。

「俺はペットボトルを集めてんの」と俺はタカシにペットボトルの入ったビニール袋を見せた。

「なんでですか？」

「さあ、なんでかね？ 強いて言うなら暇だし、弟が妹じゃないかな」

タカシは合点がいかないといった顔をした。眉間には薄く皺ができていた。

「そういえば、お前妹がいたよな？」

「ええ、いますよ。五年生の」

「お前、『お兄ちゃん』って言われてるの？」

「言われてますけど……？」

「いいなあ、お前は。それだけで兄に生まれた甲斐があるなあ」

「そうですか？」

「そうだよ。俺は弟に、『お兄ちゃん』なんて呼ばれたくないよ」

「じゃあ、なんて呼ばれたいんですか？」

「うーん……」と俺は前にあつた、妙な隙間が空いている木のテーブルに突つ伏した。

「兄上とかどうですか？」

「……。違うな。色々違うよ」

「そうですか」

「そうだよ」

蝉が一瞬鳴きやんだ。だが、すぐにまた鳴き始めた。

蝉ってどのくらいの命だっけ？

「じゃあ、先輩、僕はそろそろ行きますけど」

「そう？ 行つてらっしゃい」と俺はタカシを見ずに言った。

「ペットボトル要ります？」

「ん？」と俺が顔をあげてタカシを見ると、タカシは手に空のペットボトルを持っていた。バッグの口が開いているのを見ると、そこから取り出したようだ。「いる。欲しいです」

「じゃあ、あげます」とタカシは言つて、テーブルにペットボトルを置いた。スポーツドリンクのペットボトルだ。

「ありがとうな」と俺はタカシに言った。「妹を大切にしろよ。嫁に行つたときに泣いてあげるのがお前の使命かもしれないぞ」

「それは親父にまかせますよ」とタカシは言っ
て、歩いてどこかへ消えた。

タカシがいなくなると、蝉はさらにつるさく、
わんわんと鳴いた。生きているなあ、と俺は心
の中で呟いた。

青い庭からの道

深夜の一時、僕はまだ寝つけていなかった。というより、寝すぎていた。僕は朝から、今までずっと寝ていた。ご飯も食べず、トイレにも行かなかった。行かなかったというより、行けなかったというのが正しいのかもしれない。僕の頭は空中に漂っているようだったし、意識は世界と僕の間にあるかのようにだった。胃はずんとした痛みを持って、僕を苦しめていた。お腹が空いていても、何もそこに入れたくなかった。だが、入れないと胃が壊れるのではないかと、僕は心配していた。

風邪薬のカプセルを五十飲んで、人は死ねない。

僕はどこからどこへ行くのだろう。今、進んでいる道の先が曇って見える。クラスメイトは早々と進路を決めた。僕は？

僕はとても死にたかった。というより、最初からここにいないということにして欲しかった。生きるのが苦しい。当たり前のように周り比べられるのが辛い。僕は僕だが、彼らにとって僕は、何かだ。

僕は自然になりたかった。空とか海、空気でもいいし、酸素でもいい。いつそのこと二酸化炭素になった方がよかった。それらは、誰にとっても、空であり海であり、二酸化炭素だからだ。

苦しい。生きたくない。死にたい。なぜ、自殺は悪いことなのか。人の生死にさえ、なぜ他人は首を突っ込むのか。どうやったら、他人と僕の間にはっきりとした壁を作れるのか。

僕は本当に死にたいのか？

僕は本当のところ生きたいのではないだろうか。本当に死にたいのなら、首を吊るなり、割腹すればいいのでは？僕はまだ生きるのを止めていない。止めればいいのに。進む先が曇っているなら止めればいいのに……。いや、曇っているからいけないのか。真っ黒になればいい。

でも、未来が光っていればもつといい。

何度繰り返し返しても、僕は矛盾だらけだ。生きたいのに死にたい。一体、どうなれば気がすむのだ。

ふと、カーテンを見た。カーテンの向こうには窓があり、その向こうには庭がある。今は深夜で、明かりなどそこには付いていないはずだ。だが、なぜかカーテンの向こう側が明るく見えた。

僕はカーテンの隅を引っ張り、庭を見た。

そこには静寂があつた。庭にあるもの、そして、庭そのものが全く動いていなかった。空の色か、夜の色か、または他の色なのか、庭は青を薄く、何重にも塗り重ねられていた。

そこは僕が住んでいる世界ではなかった。僕にはそこがあちら側に見えた。

その時、僕は孤独を感じた。今までで一番の深さだった。一人で一人を心底感じた。

生きているこの世界に馴染めない僕は馬鹿だと思われているかもしれない。死という選択を持っている僕は馬鹿だと思われるかもしれない。本当に、僕は馬鹿なのだろうか？

いいや、僕は馬鹿じゃない。馬鹿じゃないだろ？ 僕よ。僕は馬鹿じゃないよな？ そうだよ。馬鹿じゃない。

僕は自分を否定できない。同じように僕は君たちを否定できない。でも、君たちは僕を否定するのか？

ずっと庭を見ていた。濃い青の空間、風のない流れ、揺れない木々、月明かりに照らされた土。美しい。美しいと分かるけど、僕にはその庭に親しみを感じられなかった。

あちら側か、こちら側か。僕の考えは矛盾している。あちら側もこちら側も、混ざっている。僕はそのごちゃごちゃの狭間にいる。どっちに行けば、どこに行けば、僕は僕なんだ？

少しでも感じてやる。僕はそう思って、部屋から廊下に出た。何を感じたいか、それさえも分からずに僕は廊下にあるガラス戸を開けた。ただ、本当に、何かを感じたかった。

僕は何も履かずに庭におりた。

大きく深呼吸をした。胃はまだ熱く、そこからはビニールのような味がこみ上げ、鼻の内側を焼いた。あの裏には砂利の小さくもつごつした感触が伝わった。

「ねえ」と後ろから声がした。

僕はその声に驚いた。そして、振りかえることができなかった。

「ねえ、お兄ちゃん何やってるの？」

そう妹が言ったので、僕はようやく振り返った。妹の声に気付かないだなんて、本当に僕の頭はどうかしている。いや、夜だからかもしれない。夜は些細なものにさえ、恐怖を加える。

「何もしていないよ。ただ庭に出てみただけ」と僕は振り返って言った。

「ふーん。早く寝ないと朝起きられないよ」と妹は言った。いつものパジャマを着ていた。

「いいよ。起きなくても。明日から夏休みなんだ」

「卓球の部活あるでしょ？」

「あるけど、どうでもいいよ」

「怒られるよ」

「怒られて、部活やめるよ。それでいいよ」

妹は黙った。だが、それも少しの間だった。

「何かあったの？」。心配そうな声だった。

「何もないよ」と僕は言った。その言葉の次にくるものは、口には出さなかった。

「お兄ちゃん」

「なに？」

「死んじやだめだよ？」

僕の言葉に何かを感じたのか、妹はそう言った。

「うん。死なないよ」と僕は言った。「まだ」と僕は心の中で付け加えた。そして、ありがとう、と思った。

「じゃあ、寝ようかな」と僕は庭からあがった。後ろは振り返らな

かった。

僕がガラス戸を閉めると、妹は鍵を閉めてくれた。

妹の部屋の前に来ると「おやすみ」と妹が言った。

「おやすみ」と僕は返して、妹がドアを閉めるのを待った。

妹がドアを閉めると、僕は自室へと戻った。

部屋に入る前に、僕は振り返った。そこには庭から続いた道があった。

僕はそれを真つすぐに見つめた。生きるとも死ねとも、それは言わなかった。だが、僕はもう少し生きてみようと思った。布団に潜り込んで、寝て、起きて……。もうしばらく。

ペットボトルボウリング 4

「おう。お前」としゃがれた声が俺を呼びとめた。

今日は、よく呼ばれる日だなと思いながら、俺は自転車を降りて、声の主の方へ歩いた。

「おう。元気か」と禿げ頭の爺さんは言った。横に少し残っていた毛は全て白髪だった。背中を少し丸めていたが、しっかりとした足取りで彼も近づいてきた。

「元気ですよ。お爺ちゃんは元気？」

「当たり前だのなんちゃらだ」

「そりゃよかった」

爺さんは俺と同じように、ビニール袋を持っていた。その中には二本のペットボトルと新聞が入っていた。

「そういえば、お爺ちゃんっていくつだった？」

「俺か？ 俺は九十二だな」

「凄いな。元気だ」

「そうでもないがな」と爺さんは、当たり前だ、と言ったことを忘れたのか、そう言った。

「で、なんで呼びとめたの？」

「お前は、勇五郎のひ孫だな？」

「うん。そうだけど。ていうか、曾爺ちゃんとも仲良かったみたいだし、俺のことも覚えていてるでしょ？」

「覚えているよ。あいつは、いい男だったからな。俺の次にな」と言って、爺さんは笑った。「お前、煙草は吸うか？」

「俺は高校生だよ？ 吸わないよ。吸えないし」

「お前は真面目だな。あいつとは違うんだな。婆さんの血が強いのかな」

「さあ。どうだろうね」と俺は小さい頃に亡くなった曾婆ちゃんのことを思い出した。曾爺ちゃんとは会ったことがない。曾爺ちゃん

は戦争で死んだ。

「お前、水いらんか？」と言って、爺さんはペットボトルを出した。

「飲みかけじゃないの？」

「違う。あたらしもんじゃ」

「新しいやつね」と俺は普段は受け取らないだろう水を受け取った。喉が渴いていたせいもあった。

「おう。お前」と爺さんが再度言った。

「なに？」

「戦争には行くなよ」と力強く彼は言った。

「うん」

「お前は戦争中だ。学校も、青春も、人生も戦争だ」

「うん」

「だけどな。戦争を人生にしちやいかんぞ」

「うん」

「それだけでいい。あとは笑って生きる」

「うん」

爺さんはそれだけ言うと、俺が来た道に戻った。

学校も、青春も、人生も戦争か。俺はどれに殺されるんだろうか。いや、どれを殺すのかな。でも、戦争は人生じゃないからな。どれも殺さず、何からも殺されず、俺は生きるんだろうな。うーん。難しい。

爺さんが言いたいことが分かる日は来るのだろうか。とりあえず、分かっていることは一つだ。俺は戦争には行かないよ。

熱

知らない町に来てみたのはいいものの、心の中は永遠にこのままのような気がしている。今、ここにいるのは自分だが、本当の自分は過去に生きているに違いない。

僕はジーンズのポケットから煙草とライターを取り出した。

知らない町の知らない公園にある、休憩所で煙草を吸うことになると、僕は一度でも想像したことがあっただろうか。

夏の風物詩である蝉は、抑揚のあるリズムで鳴いていた。リズム感のあるオスがメスにちやほやされるのだろうか。それとも、彼らのアピールポイントは違うところにあるのだろうか。まあ、人間である僕には、そんなことを知ってもどうにもならない。蝉がよつてきても困るし、蝉のように僕が鳴き出したら、周りも困る。

蒸し暑い夏が僕は苦手だった。太陽が南にある時間帯には、僕は何もできない。何もしたくない。何も考えたくない。

この休憩所の上には、藤なのか、他の植物なのか、日差しを遮ってくれるものがあつた。これがなかったら、僕はここに座り続けることができないだろう。

僕は煙草を口にくわえ、安物のライターで火をつけた。

僕は愛煙家ではない。これは偽りの行為だ。僕は決して肺に煙をいれなかった。僕には煙を楽しんでいた時期というものがあつただろうか。初めての喫煙から、徐々に惰性で吸うようになり、半年前にはそれさえやめた。周りの人間は、よく禁煙できたな、と言っていたが、僕には容易いことだった。だが、それなりの苦しみは味わった。例えるならば、飲料を全てオレンジジュースにするようなものだ。ベクトルは違うが、地味に辛い。

でも、僕は完全に煙草をやめたわけじゃない。あの禁煙の苦しみを、たまに思い出したくなるのだ。

やはり、僕は過去に生きているのかもしれない。自分が重い。重

すぎると言ってもいい。今まで生きてきた、その事実自身の背中に押し掛かる。

「お前」と男のしゃがれ声がした。横を見ると、そこには老人が立っていた。

「お前は、俺の若い頃にそっくりだ」と老人は言った。彼の手にはビニール袋が握られていた。

「僕ですか？」と答えながら、僕は煙草の灰を携帯灰皿に落とした。

「ああ。お前は、なんか大事なものを失くしとる」

「大事なものですか？」

「ああ、大事なものだ」

僕はその言葉のせいで、鳩尾のあたりが狭まるのを感じた。大事なものに、僕は心あたりがあった。六年も前のことだ。だが、失くしたとは思っていない。

「どうでしょうね」と僕は言った。

「失くしてみてもうだ？」と老人は言った。

僕はその言葉に少しむっとしたが、平静を装った。だが、彼の思う通りにはなくなかった。僕は彼の問いを無視することにした。「じゃあ、お爺ちゃんも大事なものを失くしたんですね？」

「ああ、失くしたよ」と老人は言って、首にかけていたタオルで頭を拭った。

彼はそう言うのと、テーブル越しに腰かけた。僕は気まづくなり、彼に対し体を斜めにした。

彼は、ビニール袋から新聞を取り出した。新聞は地方のものだった。僕は煙草の火を消し、携帯灰皿に捨てた。片肘をたて、頬杖をついた。公園の中心には円状の花壇があった。そこでは背の高いヒマワリが咲いていた。

大事なもの。ヒマワリ。蝉。新聞。太陽。夏。大事なもの。大事なもの。

僕の頭はだんだんと回転しなくなっていった。それは暑さのせいでもあり、老人の言葉のせいでもあり、僕の過去のせいでもあった。

「僕は、もう二十三なんです」と僕は言った。

老人は少し動いたが、何も言わなかった。

「僕は六年前に戻りたいんです。六年前は辛くも素晴らしいものでした。高校生の僕には年上の彼女がいたんです。出会ったのは夕方の公園で、季節は秋でした。彼女は一人でお酒を飲んでいました。公園のベンチに座りながら。僕は反対側にあるベンチに座って、雑誌を読んでいました。そうすると、どこからかサラリーマンが現れて、彼女をナンパし始めたんです。最初は、ただの会話かと思ってました。でも、飲みなおさないかと、その男は言いだして、彼女を誘っていました。僕はそれをちらちらと見ていました。すると、彼女と目が合ったんです。僕がなんとなく立ち上がると、彼女は、僕を指差して『弟が一緒なんで』と言いました。僕は驚きながらも、彼女に合わせて、そこから離れました。駅の改札口に着くと、僕は何としてでも、彼女の連絡先を知りたいと思いました。でも、勇気というものはなかなか出てこないものですね。僕は黙って、何も言わず、電光掲示板と彼女の顔を繰り返し見ていました。すると彼女が言ったんです。『時間があるなら、家に来ない?』って。もちろん、僕は行きました」

「名前は?」と老人は言った。

「奈緒子です。……その後、奈緒子さんは僕にお酒を勧めてきました。僕は未成年だったけど、飲むことにしました。次第に酔っぱらってきて、気付いた時には、ベッドの中でした。上着とズボンが脱がされていて、頭はがんと鳴っていました。隣には奈緒子さんが寝ていました。彼女の足先が冷たかったのをよく覚えています。でも、その冷たさは暖かくもあたったんです。氷のような感じではなくて、なんと言えはいんでしょう……。とりあえず、僕たちは抱き合って寝ました……。次の日に、僕は電話番号とメールアドレスを聞きました。奈緒子さんはきちんと教えてくれました」

僕は唾を飲んだ。

「それから、僕たちは付き合い始めました。僕の家は父と兄しかい

なくて、放任主義だったんで、奈緒子さんの家にはよく泊まりに行きました。といっても、彼女の仕事がない土日だけですけど。でも、つまり……色々と、もう、それはなくなっただんです」

急に体が重くなった気がした。前頭葉のあたりに妙な力が入っていた。

奈緒子さんは、そのあと、本社に異動した。それが彼女の希望だったし、それで僕はよかったと思う。でも、問題はその後だ。これは言い訳だが、彼女の仕事が忙しくなると僕たちの連絡回数はぐんと減った。僕は彼女のことを好きだったし、彼女も僕を好きだったと思う。でも、それは減った。

そして、ある日のこと。それは、たしか僕が高校を卒業する頃だった。奈緒子さんから細かい声で電話がかかってきた。どうやら風邪をひいたらしかった。仕事も結構忙しいと言っていた。だから、僕は彼女を精いっぱい励ました。僕も色々と考えていた。彼女とまた過ごすために、都内の大学受験をして、そこに受かっていた。だから僕は「もう少し待っていてください。絶対にそっちに行きます」と言った。でも、それが間違いだった。奈緒子さんは、今すぐに誰かが必要だったのだ。

僕は彼女の風邪が治るのを待った。でも、治っただろうと思い、電話しても、その番号はもう彼女のものではなくなっていた。メールアドレスも使えなかった。いつのまにか僕は、彼女とは違う世界に移動してしまっていた。

「人生は戦争だ」と老人は新聞越しに言った。「だが、戦争を人生にしていはいかん」

僕は何も言わなかった。僕は戦争のために、今まで生きてきたといつても過言ではない。元の世界に戻るにはどうしたらいいか悩んでもいた。

「俺は親友を亡くし、嫁を亡くし、子供も亡くした。その時の感情は抑えられん。相手を殺したい、神を殺したい、自分を殺したい。まさに戦争だ。だが、それは人生の一部分でしかない俺は思っ

いる。今の今までそれが癒えることはない。でも、せめて抱えて生きる。過去に引っぱられるな」

老人はそう言うと、新聞を閉じ、ビニール袋を持って、少し離れた休憩所へと歩いていった。

僕は、老人の言いたいことを噛みしめた。何度も頭の中で租借した。でも、僕は、どうしても戦争の中で生きたかった。過去に行けるのなら、今すぐにでも行きたかった。奈緒子さんを抱きしめて、どうにかしたかった。六年経っても、それは消えない。時間は何も消し去ってくれない。色は褪せても、いまだに記憶の面影が僕を苦しめ、幸せにする。

公園の駐車場に停めていた車に乗り込むと、携帯電話が鳴りだした。僕は、ドアを開けっ放しにして、電話を取った。

「もしもし」

車の中は、苦しみの熱でいっぱいだ。

「うん」

外からは威勢のいい熱が押し寄せる。

「分かってるよ。明日のことはちゃんと覚えてるよ」
汗が滲み出してくる。

「うん。じゃあ、また明日ね」

僕は電話を切ると、ドアを閉め、エンジンをかけた。

明日が過去に繋がることはあるのだろうかと思いながら、僕はゆっくりと車を発進させた。

彼女に犠牲ではないものを

寝ていた。

ほどよくクーラーが効いた、図書館の勉強室で僕は目を開けた。寝ている場合ではない。勉強をしなくてはならない。もう時間はあまりない。

背筋を伸ばし、椅子に座りなおした。そして、机に開かれた参考書とノートを見る。

やることをやらないと、僕は大学になんか行けやしない。僕はあの大学に行きたいから勉強するんだ。大学に……。

「起きた？」と僕にしか聞こえないくらいの声で、紗枝が言った。隣の机との遮りから彼女は顔を覗かせていた。

「うん」と僕もできるだけ小さな声で返事をした。周りには、多くはないが、僕たちと同じく勉強をしている人たちがいた。

僕は眠気を払うように息を大きく吐き、受験勉強に集中しようと努力した。参考書に書いてあるものを頭に入れて、それをノートにまとめようとした。だが、その試みは無駄に終わった。僕は隣の席で、僕の受験勉強に付き合っている恋人のことを考えた。

彼女には学生としての勉強は必要だが、受験のために勉強をする必要はない。彼女は地元の専門学校へ行くと決めている。だから、ここにいる必要はない。確かに僕たちは一緒にいたいとお互い思っている。だが、それでも、一人のことに付き合うのはおかしいことなのではないだろうか。

「紗枝」と僕は小声で隣に座っている少女に声をかけた。長く伸びた黒髪がそれに反応したように揺れた。

「なに」と彼女は言った。小さく発したせいで少し潰れた声でも、可愛く聞こえるのは僕の臆病だろうか。

「休憩しない？」

「うん。いいよ」

彼女がそう言うと、僕たちは机の上にあつた全てを片づけ、鞆の中に入れた。

そして、並んでその部屋を出た。

休憩室から出て、僕たちは中庭の方に出た。そこにはベンチがあつて、この時間帯、そこは日陰になつていた。屋内よりは暑かつたが、誰かと会話するには適した場所だつた。

僕は、自動販売機でお茶とミカンジュースを買つた。先にベンチに座つていた紗枝にそれを見せると、「ありがとう」と言つてお茶を取つた。

僕は彼女の隣に座つた。

「どうしたの？ 疲れた？」と彼女は言つて、ペットボトルの蓋を開けてお茶を飲んだ。

「うん。ちよつとね」

「寝てたもんね」

「うん。寝てた」

「昨日は眠れなかつたの？」

「いや、寝たんだけど」

僕はストローを容器から剥がして、飲み口に刺した。

「昨日は夢見た？」

「昨日？」と僕は言つて、少し考えた。具体的なものはでてこなかつたが、夢は見たような気がする。

「見たかもしれない」

「私、出てきた？」と彼女は覗きこむように、僕を見た。

「たぶんね」

「たぶん？」

「よく覚えてないよ。でも、悪い夢じゃなかつたし、たぶんね」

「ふーん」と彼女は言つて、もう一口お茶を飲んだ。「夜、電話した時に、私の夢が見たいって言つてたもんね」

「言つてたね」と僕は言つて、少し恥ずかしくなった。夜と顔の見えない会話は怖い。なんでも言つてしまう。

中庭から、図書館内の時計を見た。四時になったところだった。「なあ」と僕は言つて、オレンジジュースを飲もうとした。だが、飲んでしまうと次の言葉が出ないような気がしてやめた。

「なに？」

「勉強さ、辛くない？」

「勉強？ 私は別に……。そっちの方が辛いんじゃない？」

「俺？ うん……。まあ、少しはそうだけど……。俺は夢のためにやってるわけだから」

「私は平気だよ。特に難しいことやってるわけじゃないし。勉強したいから勉強してるわけじゃないし」

「じゃあ、なんのため？」

「ゆう君と一緒にいるため」

その言葉は真つすぐ彼女から届けられた。そのせいか、受け取つても恥ずかしさはなかった。もし、周りに誰かがいても、僕はそれを頭か心にしっかりと収めただろう。

「でも、本当にいいの？ 最後の夏休みなんだし、友達ともっと遊んだ方がいいんじゃないの？」

「遊んでるよ。電話とかメールもするし」

「でも——」

「私が一緒だと勉強できない？」

僕は黙つて首を振つた。

だが、僕は申し訳なかった。何かを犠牲にしてまで、僕に付き合わせるのは問題なのではないだろうか。

「勉強に付き合つていて嫌じゃない？」

「嫌じゃないよ？ なんで？」

「正直言つとさ」と僕は言つて一呼吸置いた。「申し訳なくて」

僕は彼女の顔を見た。怒っているのではないだろうか、僕は心配していた。

彼女は何も言わず黙つて僕の左手を握つた。そのせいで、僕はオレンジジュースをベンチに置くはめになった。

彼女の右耳にはピアスに穴が開いていた。一年前に開けたものだった。今日の彼女は、化粧をしていない。制服を着ている時は、彼女は決して化粧をしない。彼女の唇はいつもと同じように艶やかだった。赤く、果実の中身みたいに潤っている。彼女の右目は、左目と大きさが少し違う。ほんの少しだが、右目の方が大きい。そのわずかな差異は、僕に安心感を与えてくれる。鼻は少し低い。でも、潰れてはいない。それは、なぜか僕にパンプスを思い起こさせる。顎のラインは、手のひらで支えなくなる柔らかな線を描いていた。彼女は僕のアクセサリーでも、芸術品でも、嗜好品でもない。彼女は彼女だ。だが、僕は彼女を手にとって、觀賞して、愛でたい。例え、僕らが違う場所にいたとしても。

「私は、ここにいたい」

僕の彼女がそう言った。

「俺もだよ。でも、俺は遠くに行くよ?」

「だから少しでも、一緒にいたい」

そう言う彼女は、さらに僕の手を強く握った。僕の手の中は温かく、手のひらは冷たかった。

紫外線が空から降り注いでいる。僕らはそれを皮膚に受けている。そして、それをひしひしと感じている。

「私たちは犠牲なんて払ってないんだよ」

「そうかな?」

「そうだよ。一緒にいる。それだけでいいんじゃない?」

「そうかな……?」

本当にそうかな? 僕らは一緒にいるだけでいいんだろうか?

「俺はね、正直に言うとなんか俺が我慢しているような感じがしてならないんだよ」

「我慢してないよ」

「でも、そう思えて仕方がないんだよ」

「じゃあ……、どうすればいいの?」

「何もしなくていいんだよ。ただ、紗枝は『私たちは犠牲なんて払

ってない』って言ったけど、少なくとも紗枝は犠牲を払っている。友達と遊びに行かずに、しなくてもいい勉強に付き合っている。だからさ、つまりさ……、俺も犠牲を払いたんだよ」

犠牲？ それは犠牲か？

「犠牲じゃないな」と僕は言った。「犠牲を払いたくないじゃないよ。もつと一緒にいたい。何の心配もなく、何の苦痛もなく、紗枝を好きでいたい」

「うん」と紗枝は言った。

僕は紗枝をもつと愛したい。彼女のために僕の全てを捨ててやりたい。はたしてそれが愛と言えるのかどうか分からないけど。

「明日は暇？」と僕は聞いた。

「うん」と紗枝は言った。

「どこかに遊びに行こう。高校生活最後の夏休みだし」

「うん」

「よかった。じゃあ、もう勉強は終わり。帰ろうか。そうだ、うちでご飯食べて行きなよ。どこに行くかも決めよう」

「うん」

僕はオレンジジュースを手放し、彼女に握られていた手を握り返した。

「冷たい」と彼女は言って笑った。

僕は大学に行くために勉強をする。でも、そのために、この夏休みを無駄にはしたくない。彼女との思い出作りを諦めたりしない。彼女に犠牲を払わせない。

僕はどうしよくもなく、彼女と離れたくない。

「受験勉強、頑張つてね」と紗枝は言った。

僕たちは手をつないで、家へと帰っていた。

「頑張るよ。大学にも行くし」

「行くし？」

「なんでもない」と僕は言って、その次の言葉をはぐらかした。

左肩に柔らかな重みを感じると、シャンプーの香りがした。

ペットボトルボウリング 5

なんてことだろう。僕の目の前がくると回っている。頭が変になってしまったのかもしれない。だが、そんなことはたいしたことではない。問題は他にある。なんてことだ。こんなことがあつていいのだろうか？ あつていいのだろうか。そんな話はよく聞くし、実際に一度や二度は体験したことある。でも、出来るならば体験したくなかった。僕はそのままベンチに座っていていいのだろうか。どこかに走り出した方が、窮屈になつてゐる心を温かくできるのではないだろうか。もしかしたら、ベンチに横になつた方がいいのかもしれない。とにかく、これは凄い衝撃だ。

「おい」と聞きなれた声が聞こえた。

「おい、田島」と隣に座つていた矢野がさらに言った。「そろそろ帰らねー？　夕立とか心配なんだけど」

「いや、それどころじゃない」

「何が？」と矢野は言つて、空になつたペットボトルで手のひらを叩いた。「帰ろうぜ」

「いや、帰る前に聞きたい」

「なに？」

「もし、好きな人が知らない男と手をつないで歩いていたらどう思う？」

「どう思つて……。さあ？　何かを思う暇があるのか？」

「ない……。なんだか、今すぐ家に帰つて、ベッドで死ぬように眠りたい気分だ」

「とにかく帰ろうぜ。クーラーのかかった冷えた部屋で、寒いと言いながら布団をかぶるのもいいじゃん」

「むしろ、死にたい」

出席番号十番の、彼女が手を繋いでいた男は誰だろうか？　彼氏か？　彼氏か……。いや、違つかもしれない……。でも、彼氏しか

ないだろうなあ。

「あ、先輩じゃないですか」と聞いたことのある声が聞こえた。

僕たちの座っていたベンチの前に茶色の自転車がとまった。相変わらず変な奴だ。

「なんだよ、後輩」と僕は中学時代、後輩だった男に言った。

「こんなところで何しているんですか？」

「友達の家に行ってきた、その帰り」と矢野が返事をした。「お前は？」

「ちよつとしたサイクリングです」

僕は自転車の前かごにビニール袋が入っているのに気がついた。開かれた口からはペットボトルらしきものがのぞいている。

「その前かごにあるやつは？」と僕は聞いた。

「これですか？ これは頼まれたやつです。ペットボトルを集めている最中です」

「お前は変な奴だなあ」

「そうですか？」

「そうだよ。お前は変な奴だよ。でも、お前でも好きな人が知らない男と手を繋いでいるところを見たら落ち込むだろうなあ」

「まあ、そりゃあ」と変な奴は言った。何を言っているんだろうという顔をしている。そりゃあ、そうかもしれないな。

「好きな人が知らない男と手を繋いで歩いているところを見たんですか？」とその変な後輩は言った。

「え？ 見たの？」と矢野も僕の顔を見た。

「見てないけどさ、なんかそういう想像すると悲しくなったんだよ」と僕は嘘をついた。同時にさっき見た光景が、よみがえった。ドンと音がした気がした。ダイブされたベッドはこういう気持ちなのかもしれない。いきなりで驚く。思わず叫びたくなる。

「見たらショックで、何も考えられないですよ。矢野さん」

「俺？ まあ、考えられないだろうな。茫然自失ってやつになんのかもな」

「僕なら家に帰ってゆつくり寝ますね。起きていたくないですよ」
「そうかな？」

「そうですね。矢野さんは、どうします？」

「さあ。よく分からん。残念ながら、そういう経験がない」
「なんだとこの野郎。」

「とにかく、そろそろ帰った方がいいんじゃないですか？」と後輩は矢野に向かって言った。だが、ちらりと僕を見たような気もした。
「そうなんだよ。俺も帰りたいんだけど、こいつがなかなか帰りがらないんだよ」

「帰るよ。腹減ったし。風呂にも入りたい。眠いし、寝たい」

「じゃあ、帰ろうぜ。お前はもう帰るの？」

「僕はまだ帰らないです。ペットボトル集めないと」と後輩は前かごにあるものを指差して言った。

「じゃあ、これいる？」と矢野はペットボトルを差し出した。

「いいんですか？」

「いいに決まってるだろ。いらんよ、こんなもの」

「ありがとうございます」と後輩はそれを受け取って、ビニール袋の中に入れた。

「じゃあ、僕はもう行きますね」

「ああ、またな」と矢野は言った。

僕も手を少しあげて返事をした。

変な後輩は自転車にまたがると、ペダルを漕ぎ始めた。何メートルか進んだあと、一度、こつちを振り返って、手を振った。

「変な奴だな」と手を振り返しながら僕は言った。

「そうか？」

「そうだよ。お前も変だけど、あいつも変だ」

「お前も変だよ」

「そうか？」

「そうだよ」

「帰るか」

「そうだな」

そう言つと僕たちはベンチから立ち上がった。

今日はぐっすりと寝たい。何も考えずに、何も思い出さずに寝たい。彼女の顔がまた、浮かんだ。僕は感情が声を出そうになるのを我慢して一歩、一歩、と意識をして歩き始めた。

ペットボトルボウリング 6

道路があつという間に、より青黒くなつていった。携帯電話を見ると、時刻は四時半を少し過ぎたところだった。午後六時には閉める、この田舎にしかないコンビニとも言える、日用品や駄菓子を売っているこのお店で、私は今日も店番をしている。

昨日に続いての夕立。太陽は隠れておらず、地面や建物は光っている。雨に濡れて、それはさらに光る。

「綺麗だな」と私は口に出した。私しかない、お店の中のどこかへ、その声は吸いこまれていった。

私は雨が好きだ。理由は二つ。一つは子供の頃、母と店番をしていた記憶が蘇るから。もう一つは、優しい人がやってくるから。

そう思っているところに、さっそく理由の一つがやってきた。彼は、雨に濡れながら茶色のフレームが特徴的な自転車を店先にとめた。なぜか前かごにはビニールに入ったペットボトルがある。

短くしていた髪は、だいぶ伸びてきていた。そろそろ切り時かもしれない。白い味気のないＴシャツは、お洒落とは言い難いが、素朴な感じがして私は好きだ。田舎のここには似合っていると思う。

扉が開いて、彼が中に入ってくる。

「雨が降ってきたよ。夕立かな？」と彼は言った。

「たぶんね」と私は言って、タオルを取りに、奥に繋がっている家の方へと戻った。別にいいよ、と聞こえたような気がしたが、私はそれを無視した。

戻ってくると、彼はレジの前で、ビニール袋を持って立っていた。「はい」とタオルを渡した。

「ありがとう」と彼は言って、床にペットボトルを置いて、髪を拭き始めた。

「拭いてあげようか？」

「いいよ」

「遠慮しなくてもいいのに」

「自分で出来ることは、自分でやるよ」

「……ところで、そのペットボトルは何？」

「これ？ これは、弟に頼まれたやつ」

「なんで？」

「夏休みの工作に使うって言ってた。何を作るのかは分からないけど」と彼は言つて、レジ台にタオルを置いた。「タオルありがとう」「どういたしまして。とりあえず、こっちなよ」と私は彼をレジの内側に招いた。

「ちよつと待つて。なんか飲み物貰う」

彼は飲料水が入っているショーケースの前に行くと、微炭酸の飲料水を手に取つて戻つて来た。

「はい」とペットボトルを台に置いた。

「あげる」

「いや、いいよ。買うよ」と財布を出して言った。

「あげる」

「買う」

「あげる」

「どうして？」と彼は言つて、出していた財布をポケットにもどした。

「そうしたい気分だから」

「変な気分だ」

「でも、嫌な気分ではないでしょ？」

「まあ、そうだね」

そう言つと、彼は内側に周つて来て、私の隣にあつた椅子へと座つた。

「随分と身長伸びたね」と私は、タオルで彼の髪を軽く拭きながら言つた。

「そう？ 分かんないや」と言いながら、彼は私に髪を拭かせてくれた。雨が少しずつタオルに吸いこまれていく。タオルはしっとり

と、さわり心地のいい感触になっていた。

「今、何センチ？」

「うーん……。たぶん百七五センチと少し」

「もう追い越されちゃったな」

「そうだね。でも、追い越すのに三年もかった」

「三年しかかかってないよ」

「母親は一年で追い越したよ。葵さんは背が高いから、一苦労だよ」

「苦労なんてしてないのにね」と私は言っ、Tシャツを拭き始めた。

「成長痛はけっこう辛いんだよ」

「もう忘れちゃったな」

「俺も忘れたいよ」

あらかた拭き終わると、私はタオルを台に置いた。彼は私から貰った飲料水を飲み始めた。大きくなったな、と私は本当に思った。身長もそうだが、体つきも変わった。声も変わった。あの頃の彼と同じ人物だとは誰が思うだろうか。だが、変わらないものもある。そこは私が一番好きのところだ。でも、それが誰にも分かるものなのかどうか分らない。気付かない人もいるだろう。そういう人は、彼がどんな人なのか分らないだろう。はっきり言っ、私は、彼を全面的に信用している。もう疑うことができない。それは、盲目とも言えるのかもしれないが、他人がそう言っ、たとしても私は気にしない。目を瞑っ、ても、私には見えるものがある。

彼は台に突っ伏して、外を見始めた。彼の後頭部には、もう雨粒の一つもない。

外はまだ雨だった。そろそろ止んでもいい頃だが、強くなったり弱くなったりしている雨模様の先は見えない。でも、不安はない。こういう時、いつも思い出すのは三年前だ。母親が亡くなっ、一か月経ったあとの、七月上旬。高校からの帰り、私が駅で雨が止むのを待っ、ていた日のこと。

私は隣に座っ、ている彼の手を取り、しげしげと見た。彼はそれに

何も言わず、黙って外を見ていた。

彼の右手にある指は、男の子の指。決して、美しいとは言えない。すらりと伸びてはいないし、太い骨が厚い皮膚に覆われている。私が小人になったら、もしかしたらそれは山か、岩かに見えるかもしれない。でも、そこには安心感がある。親指の付け根にある金星丘はぼつてりとした肉をつけている。そこから緩やかに、反対側に下り、月丘で少し、盛りかえす。モンゴルには行ったことがないが、もしかしたらそこにある景色に似ているのかもしれない。私は、そこを親指で撫でた。それに連れられて、皮が少し動く。細波がそこに立つ。

私は、女性の手というのが少し苦手だ。美しいが、どこか狡猾さがあるような気がして、信用できない。ただ、母の手は好きだ。あれだけは特別だ。

母の愛しみを持った手の温度が、目頭に蘇ってきた。

彼は崩していた体を持ち上げ、外を見るのをやめた。かわりに私の手を見て、触り始めた。

「くすぐりたい」と私が言うと、彼は少し強くさわり始めた。

彼は私の小指をぐりぐりと動かし、指紋を確かめるように親指でなぞった。次に薬指、そして中指というように、それは移動した。だが、その動作は確認をするためではなかった。それは猫を撫でるようなものだった。私は、それを何度も経験していた。そして、私はそれが好きだった。気を許した動物のように、私は手の腹を彼に預け続けた。

雨の道路を、一台でも車が通っただろうか。通ったとしたならば、私はそれに気がつかなかった。

彼は、私の手を撫でるのをやめて、手の甲を支えた。いつの間にか私の手は温かくなっていた。そこで、私は初めて、私の手が冷たかったのかもしれないということに気がついた。

「そつえばさ。先輩が、好きな人が知らない男と手を繋いでいるのを見たって言ってただけだ」と彼は私の目を見て言った。

「うん」と私は反応して、彼の目を見返した。

「そういうのって辛いだろうね」

「そうだね。天と地がひっくりかえるかもね」

雨はほとんど止んでいた。夏の太陽の力で、雨は空へと戻っていきだろう。

私は、彼が誰か、他の女の子と手を繋いでいるシーンを想像してみた。私を支えているこの手が、他の誰かを抱きしめていた。私は、その手を奪い返そうとする。だが、思いとどまる。年下の男を奪おうとする無様な私。やはり、嫉妬らしきものがそこにはあった。彼の温かさが他の誰かのものになるのが嫌だった。だが、私はそれ以上に彼の幸せを望んだ。私は黙って、それを見続け、後ろを向いて歩いていくに決まっている。そうあってほしい。

私の手にまた力が込められた。いつの間には私は、彼の目から視線を外して、自分の手を見ていた。

「まあ、なんだろう……」と彼は言っただけ、空いている手で、私のもう一方の手を握った。「冷え性の人は葵さんしか知らないや」

雨が完全に止んでしまうと、彼は自転車に乗って、家へと帰った。私は、彼の背中が見えなくなるまで、店先でその姿を追っていた。私は、彼を信頼している。彼は私が考えている優しさの象徴だ。私はいつまでも待てるし、彼はいつでも私の手を温めてくれるだろう。あの雨の日、彼に出会ったことを、私は全てのものに感謝する。

強いていうなら童謡のような子

お弁当づくりには少し慣れた。いつも、母がやっていたことをするのは、苦しくも楽しいことだった。だが、今日は失敗した。予定の時間に起きられなかったせいで、計画が少し乱れた。大幅に乱れてくれたら、諦めがついたのだけれど、巻き返しができそうな気がしたから、私は急いで弁当を作った。そのせいで、私は生まれて初めて駆け込み乗車というものをした。少し恥ずかしかったが、それは大丈夫だ。問題は他のことにある。お弁当は私と父の分、両方作ったし、学校にも遅刻せずに間に合ったから、それらは問題じゃない。問題は、そう、この雨だ。私は出掛ける前に、天気予報を見るのを忘れた。

午後の空には、黒雲が徐々に広がっていった。だが、まだ雨は降っていなかった。私は「雨よ、降るな」と祈りながら授業を受けていた。その祈りはどこかに届いたのか、学校を出てからも雨は降らなかった。だが、雨は当然のように降り始めた。私は、最初の雨粒を電車の窓で確認した。丸み帯びたそれは、私の望みを絶ち、計画の再考を促した。

だが、朝から狂っていた計画を立て直すことはできなかった。頭を動かしても、考えを横にずらしても、事の歯車は噛みあわなかった。

私は駅の入口で、空から降ってくる雨を見ていた。少し雨が弱まってきたら走って帰ろうと決心したのは、改札口を出て十分後だった。だが、雨は少しも弱まる気配がなかった。

「お姉さん」と聞こえた。だが、私はその「お姉さん」が私だとは思わなかった。

「お姉さん」ともう一度、それは聞こえた。

私は、声のする方を向いた。

私の隣にはいつの間にか男の子がいた。

「傘忘れたの？」

「そう」と私は言いながら、男の子を観察した。

男の子の制服は中学校のものだった。一年前、私はそれをよく見ていた。だが、男の子はまだ小さく（私が少し大きすぎるというのもあるが）、小学生みたいだった。つまり、この子は中学一年生だ。少しぶかぶかの学生服を着ているのにも納得ができる。

「傘あげるよ」と男の子は言った。

「いいよ。もうちょっとしたら走って帰るから」

「風邪ひくよ」

「君も私に傘を貸したら、雨に濡れて、風邪ひくでしょ？」

「俺は風邪ひいてもいいよ。風邪ひいたら学校に行かなくていいから」

「だめだよ。学校にはちゃんと行かないと」

「お姉さんこそだめだよ。風邪ひいちゃ」

男の子は私にぐつと傘を寄せた。だけど私はそれを受け取らなかった。

「じゃあ、迎えにきてもらうから。それでいいでしょ？」

「本当に？」と男の子は疑いの目で私を見た。

「本当に。約束する」

私がそう言つと、男の子は小指を出した。指きりだろうか。まだまだ幼稚だな。

私も小指を出し、彼の小指にひっかけた。

「指きりげんまん、嘘ついたら針千本飲ます」と私は歌った。

「お姉さん、手が冷たいの？」と彼は言つて手を握つて来た。

「うわっ」

「あ、ごめん」と彼は私の手を離れた。「指が冷たかったからつい」

「いや、うん。大丈夫だけど」

彼は心配そうに私の手を見つめ、そして、駅前の道路を見た。

「……雨止みそうにないね」

確かに、彼が言うように雨は激しく、地面を打っていた。それは

流れとなり、排水溝へと落ちている。道路の陥没はいつの間にか水たまりになっていた。誰が私を迎えにきてくれるのだろうか。誰もこない。父親は仕事。母は……天国？ 私はここにいて、私は家に帰る。家に帰って、おばさんとお店の番を交代する。

あ。お店の番。おばさんが待っている。忘れていた。……今日の私は本当にどうしたんだろうか。

「お姉さん」と彼は言った。「傘」

「うん……」と私は曖昧に返事をした。帰りたし、帰らなければならぬけれど、彼から傘を奪うのは嫌だった。

沈黙が少し続いた。

「恥ずかしいけど、一緒に帰る？」と男の子の声がした。

数秒間、私は止まった。止まらない雨の音と、建物から垂れる滴の音はなんとなく聞こえてきていた。そして、知らぬ間に、何にも染まっていない、純朴なものが私の心に入ってきた。

「やっぱあげるよ、傘」と彼は反応がないのを心配したのか、私の手に傘を当てた。

優しい子だ。

「私は恥ずかしくないけど、大丈夫？」

「まあ、ぎりぎり大丈夫。お姉さんだし」

「私が同級生だったら？」

「傘を無理やり渡して、逃げる」

「変な子」

「たまに言われる」と彼は言っ、傘を開いた。「どこが変なのか理解しているけど、なんでそれが変なのかは分からないんだよ」

「私は好きだな。その変なところ」

私は彼の傘を受け取って、彼と二人でその下に入った。雨の中へ、私たちは進んだ。

「俺は嫌いになるかもしれない。皆に変な奴って言われるんだよ」

「自分を嫌いになっちゃだめ。皆があなたを嫌いになっても、自分を愛さないため。二人分でも、三人分でも、自分を愛さない」と

と私は、母が言っていたことを思い出しながら言った。

「別に嫌われてはいないよ」と彼は言って笑った。

「あ、ごめん」

「いいよ。……そういえば、お姉さん、名前は？」

「あれ？ どうしたの？ もしかしてナンパ？」と私は彼をからかった。

「そうだよ。一目惚れなんだ」と彼は言った。

「そうかー。お姉さん、美人だからね」と私は驚きを隠しながら言った。

「お父さんがお母さんに初めて言った言葉だよ。でも、お姉さんは自分を好きなんだよね。ナルシストってやつなの？」

なんて子だろう。口が達者と言えればいいんだろうか。

「まあね。綺麗でしょ？」

「まあね」

雨の中を歩き始めて十分。雨が少し弱まってきた。タイミングが悪いというべきなのだが、私はそれを嘆きはしなかった。今日は、そういう日だし、雨の中を歩きだした時から、なんだか嬉しい気分になっていた。

「あそこが私のうちなんだけど」とお店の名前が大きく書かれた看板を指差して言った。

「そうなんだ」

「あと、私の名前、『葵』っていうんだけど」

「……そうなんだ」

「あなたの名前は？」

「……秘密」

「なんで？ せっかく教えたのに」

「恥ずかしいから」

「えー。いいじゃん。教えてよ」

「次来たら教える」と彼は言った。

「次？」

「うん。お店」

「ああ、うん。ぜひ来て。お姉ちゃん土日暇だから、お店にいるよ」
「うん。今度来るよ」

家に着くと、私は彼にお礼を言って別れた。彼は道を曲がる時に、手を振った。私は手を振り返した。

「あ、お帰り」と私がお店に入ると叔母さんが言った。

「ただいま。ごめん。傘忘れて、なかなか帰れなかった」

「ううん。いいけど……。どうやって帰ってきたの？」

「傘借りた」

「傘？」と言いおばさんはお茶を飲んだ。「で、その傘はどこ？」

「ああ、ついでに送ってもらったから」

「えー、誰に？　もしかして彼氏？」

「ううん。ナンパされた」と私は言って、叔母さんの反応を見た。

「ナンパ！　おや、まあ」と叔母は案の定驚いていた。「で、どんな男だった？」

「うーん」と私は悩みながら、あの男の子を思い浮かべた。何と云えばいいのだろうか。簡単に説明できる、適切な言葉が思い浮かばなかった。強いて言うなら、なんと云えるだろう。そして、私は、彼の言葉を思い出した。「恥ずかしいけど、一緒に帰る？」という、思わず抱きしめたくなるあの言葉を。

「強いて言うなら……、童謡のような子かな。優しくて、純朴で、春のピクニックのような、夏休みの思い出のような、落ち葉を集めてつくった焼き芋のような、冬のこたつのような」

「……変な男だねえ」と叔母さんは言った。

「うん。変だけど、素敵な子だった」

変な子だけど、素敵な子だった。私は心でその言葉を繰り返してみた。

雨。空から落ちてくる雨は、まだまだ地面で跳ね、溶け込んでいくだろう。

私は思わず笑いそうになった。おかしいんじゃないくて、楽しかつ

た。あの子が来たら、お菓子をとくさんやろう。私はそう決めて、
着替えるために、一度部屋へと戻った。

ペットボトルボウリング 7

「ただいまー」と俺は玄関から家へと戻った。
大きな太陽の下に晒され、雨に打たれた俺には、冷たい風が待っているはずだ。

「葵お兄ちゃん、おかえりー」と弟の声が居間から聞こえてくる。

俺はさっそく、ご主人様に頼まれたものを持ち、居間へと入った。
「おう。ペットボトル持ってきたぞ」

「ペットボトルね」と弟はさりと云った。

「ほい」と俺は言つて、口を結んでいたペットボトル入りのビニール袋を投げた。

それは扇風機の前に座っていた弟の下へと転がったが、弟はそれに反応しなかった。

「お兄ちゃん」

「なんだ、弟」

「実は、ペットボトルもういらなんだよね」

全く、弟は何を言っているのだろうか。

「どういう意味だ」

「いや、だからペットボトルじゃない。違うやつ作ることにした」

「違うやつって？」

「もっと面白いやつ」

さすがの俺も呆れたというやつだろう。俺は、自分の中に怒りの感情がないのを不思議に思いながら、弟の足もとにあったビニールを手を取った。結び目を解き、中か五本のペットボトルを出した。
「あ、このペットボトルも捨てて」と弟が、机の上に置いていたペットボトルを俺のところへ転がした。

さすがに笑いがこみ上げた。だが、やはり怒りはなかった。なんだろうか、この感覚は。

俺は、弟のペットボトルも拾い集めた。

「ありがとう」と弟は言った。

「ああ」と俺はその言葉に反応した。もともとなかった怒りは、存在さえ曖昧になり、笑いは安堵へと変わった。俺は弟に甘すぎるのかもしれない。

俺は少し湿っていた庭へと降りた。そして、集めてきた五本のペットボトルと弟が持っていた五本のペットボトルのキャップを開けた。庭にある水道の蛇口を捻り、それらに水を入れていった。水が入りきると俺はキャップを閉めた。

俺はその十本をできるだけ正三角形になるように並べていった。そして、庭の隅に転がっていたビニール製の赤いボールを手に取った。大きさはちょうど、ボウリングの玉くらいだった。

僕はペットボトルからできるだけ離れた。庭の端に来ると、反対側へ振り向いた。砂利や石、苔があるものの、目標に向かう、なかなかの直線だった。

俺はボールを抱え込むように右手で持ち、後ろに振りかぶり、そして転がした。それは、砂利に邪魔されながら進んでいった。並べていたペットボトルのピンはそれに当たり、六本が倒れた。後ろの三本と、その前列の一本は何事もなかったかのように仁王立ちをしていた。

俺はペットボトルをまた正三角形に並べなおした。そして、ボールを持って、また端へと戻った。

そして、転がした。ペットボトルが倒れる。中身が白くなり、水が少し泡立ったのが分かる。またペットボトルを並べなおす。元の位置へ戻る。ボールを転がす。それを何度か繰り返した。

「それ面白い？」と弟が縁側に立って言った。

「これ？ つまらないよ。ピンが倒れて、それを直して、また倒すだけ」

「じゃあ、なんでやってるの？」

「十本倒したいからだよ」

「十本倒したら面白いの？」

「さあ。どうだろうね。でも」と俺は言いながらペットボトルを並べなおした。「面白くもある」

「つまらないって言ったじゃん」

「どっちでもあるんだよ。お前はつまらないやつだな」

「あ、もしかして、Bowlingとbowlingをかけてんの？」

「お前はおっさんか。そして、小学生のくせに英語を知りすぎだ」

俺はそう言つて、もう一度、端へと戻り、ボールを転がした。力を入れすぎたせいか、それは二度しか跳ねなかった。だが、最前列のペットボトルに当たると、それは後ろのピンもなぎ倒していった。「惜しい」と弟が言った。

そこには一本だけペットボトルが残っていた。

「惜しかったな」と俺は言いながら、またペットボトルのところへ戻り、並べなおした。

「今度は僕がやっていい？」と弟は言った。

「いいよ。あんまり強くなげるなよ」と俺は言つて、ボールを弟に渡した。

弟は裸足で庭に下り、端へと行った。そして、ボールを転がした。それは横に逸れるように転がってきて、三角形を掠めていった。ペットボトルは二本しか倒れなかった。

「あー」と弟は言つて、悔しがった。「お兄ちゃん、ボール。あとペットボトルなおして」

「だめ」と俺は言った。

「なんで？」と弟は言った。

「立て直すこともやれ」

「なんで？」

「優しくなるためだよ」

弟は腑に落ちないといった感じに、ゆっくりと歩いて戻ってきた。そして、「つまんない」と言いながらもペットボトルを並べなおした。俺はボールを弟に渡し、縁側に座った。

弟はそれから何度もペットボトルボウリングを繰り返した。倒し

ては、戻ってきて、ピンを並べなおした。繰り返し、何度もそうした。

十本のそれを全て倒したのは十五投目だった。

「やった！」と弟は握りしめた両手を大きく空に突き上げた。

「おめでとう」

「やったー。やっとだー」と言いながら弟は戻ってきた。

「どうだった？ 十本倒してみて」

弟は、俺の問いに答えずにペットボトルをまた並べなおしはじめた。だが、ボールを取って、端に戻る時に笑顔で言った。「つまんない！」と。

もし倒れても、いつかは立ち上がらなければならない。俺はずっと前からそう思っていた。その気持ちや考えや、せめて感覚が、弟に分かってもらえれば俺は嬉しい。

ペットボトルボウリング。なんてつまらない遊びなんだろう。でも、俺たちはそれに似ている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1406u/>

ペットボトルボウリング

2011年6月22日19時10分発行